若手医師リレーエッセイ
Spirits
スピリッツ

海の香りとともに歩む初期研修医の日々

函館五稜郭病院
眞鍋壮大郎（まなべそうたろう）

旭川市出身、小学校入学と同時に札幌に引っ越し小学校から大学時代を過ごしたのち、函館で初期研修をすることになる。趣味は野球観戦（テレビも含む）。大学時代は憧れの弓道部に入部するが憎きCOVID-19により練習や大会への参加ができず現役時代を棒に振る。

初めまして、函館五稜郭病院初期研修１年目の眞鍋壮大郎と申します。この度は同じく函館五稜郭病院で勤務する大島陸先生からバトンを受け継ぎ、エッセイを書かせていただく運びとなりました。大島先生は、私が学生時代に函館五稜郭病院に実習に訪れた際に、歓迎会を開いてくれたり、入職してからも顔を合わせたら研修のことを気遣ってくれたりなど、大変後輩思いの頼れる先輩です。

さて、函館は歴史と文化が息づく港町であり、五稜郭の桜や函館山からの夜景など、四季折々の風景が魅力的です。その町で医師としての日々を送れることをとても嬉しく感じています。大学６年生のとき、いよいよ初期研修先を決める段階になり、各地の病院見学に足を運びました。私が実際に見学に行ったのは、函館、室蘭、苫小牧、釧路の病院です。さて、読者の皆様はこの共通点にお気づきでしょうか。そう、すべて海沿いの町なのです。特に意識して「海沿いの病院を選ぼう」と思っていたわけではありませんが、気がつけば自然とそうなっていました。無意識に海を求めていたのでしょうか（笑）。

その中でも函館は、学生時代から何度か旅行で訪れていた憧れの町でした。初期研修の２年間をこの町で過ごせることは、私にとって大きな喜びです。通勤路や帰り道で風が吹くと、ふっと海の匂いがしてくる瞬間があります。あの独特の潮の香りを感じると、日々の忙しさの中でも気持ちが少し落ち着きます（決して幻臭ではないはずです…）。

函館五稜郭病院の魅力は、立地の良さにもあります。繁華街まで徒歩５分という近さのおかげで、同期や先輩、さらには上の先生方とも気軽に食事に行くことができます。おかげで病院全体の雰囲気は風通しがよく、働きやすさにつながっていると感じています。飲み会の席で交わす何気ない会話から学ぶことも多く、忙しい日々の中でよい息抜きにもなっています。

函館の食文化も魅力的です。居酒屋で出てくる刺身は格別で、札幌にいた頃も「刺身は美味しい」と思っていましたが、函館はそのレベルが一段階違います。さらに驚いたのは、スーパーで売られている刺身の質の高さです。新鮮で美味しい刺身を夕飯に少し加えるのが、研修を頑張った自分への小さなご褒美になっています。

一人暮らしを始めてからは、新たな楽しみも増えました。それは「部屋のコーディネート」です。実家暮らししか経験のなかった私は、研修医宿舎に移る際、家具らしい家具をほとんど持っていませんでした。テレビボードもチェストもソファもない、まっさらな部屋からのスタートです。皆さんは「どうぶつの森 ハッピーホームデザイナー」というゲームをご存じでしょうか。学生時代にハマったことのある私は、今まさに“リアル版ハッピーホームデザイナー”をしているような気持ちで、家具をひとつずつ揃えていっています。最近は家電や雑貨まで整ってきて、次に狙っているのは少しお高めのコーヒーマシンです。朝起きて淹れたてのコーヒーを飲んでから出勤する、そんな生活に憧れています。もっとも、朝が弱い私にその余裕があるかどうかは別の話ですが（笑）。

さて、ここで少しだけ研修医生活の話を。正直に言えば、初期研修は「負けっぱなしの毎日」です。知らないことが次々と出てきて、時には上級医に叱られ、自分の未熟さに落ち込むこともしばしばです。ですが、落ち込んでいるだけでは朝はすぐにやってきます。疲弊しながらも前に進む日々の中で、やりがいを感じる瞬間も確かにあります。

消化器内科をローテートしていた時のことです。外来に腹水がたまった患者さんが来られ、指導医から「やってみるか」と声をかけていただきました。以前から「そのうち腹腔穿刺をやってもらうから準備しておいてね」と言われていた私は、本や動画で手技を勉強しながらその日を待っていました。そして迎えた初めての穿刺。緊張しながらも無事に腹水を抜くことができました。手技後に患者さんから「だいぶ楽になったよ、ありがとう」と声をかけていただいたとき、胸に熱いものが込み上げてきました。辛いことばかりの毎日でも、こうした経験が「明日も頑張ろう」と自分を奮い立たせてくれます。

まだ医師として歩み始めたばかりで、何もできず悔しい思いをしながら毎日を過ごしていますが、ゆくゆくは立派な医師となれるよう、一日一日の経験を大切に積み重ねていきたいです。このエッセイが、同じ道を歩む若手医師や学生の皆さんにとって少しでも参考や励みになれば幸いです。